

『初中級からはじめる日本語プロジェクト・ワーク』教師用手引き

筆者からのメッセージ

本書は、東京外国語大学の基礎日本語プログラム「日本語総合3」（中級前半レベル）の授業で使用しました。読解、語彙・文型導入をメインとした総合教科書を1～2課進めたのち、本書で1つのプロジェクト・ワークを行うという形でカリキュラムを組んで、授業を行いました。学習者から「飽きない」「楽しんで学べる」という肯定的な評価を多く得たことで、このやり方を定着させました。学習者から好評価を得られたのには、2つの理由があるのではないかと考えています。

1つ目としては、初級段階を終えたばかりの学習者にとって、多かれ少なかれ、中級の総合教科書は難しいと感じられるようでした。会話スキットしかないことが多い初級の総合教科書に対し、中級の総合教科書には長めの読み物が登場し、提示される文型も難しくなります。その結果、授業の進め方によっては詰め込み的に感じられてしまうこともあるようです。東京外国語大学の基礎日本語プログラムの中級学習者の場合、それぞれの国で媒介語を交えた日本語教育を受けてきた学習者も多かったため、中級の壁に加えて直接法の壁、という二重の難しさを感じている様子が見受けられました。

一概には言えませんが、初級で学んだ文型を産出する場が十分でないまま、新たに漢字、語彙、文型が次から次に導入されることで消化不良を起こしたり、結果的に「楽しくない」と感じて学習を続けるモチベーションを失ってしまったりすることもあります。中級相当の項目を学んでいかなければステップアップしませんが、それと同時に、ワイワイとグループワークをしながら学べる時間を挟むことによって「詰め込み」「繰り返し」というネガティブな面が緩和される効果はあったように思います。学習者の中には、本書の内容も難しいと感じる人もいましたが、興味を持ってもらいやすい内容になっていたためか、毎回の授業評価アンケートでは、肯定的な評価を示す学習者が多く見られました。この活動を経てリフレッシュし、また読解・文型中心の総合教科書に戻ったときに「よし、また頑張ろう」と気持ちを切り替えて取り組むという好循環をうまく作り出せていたと感じています。

2つ目ですが、多くの中級総合教科書は読み物中心になっており、そこに出てきた語彙や文型を学ぶという流れになっています。課の最後に、その課のテーマについて「みなさんの国ではどうですか。話し合しましょう」「作文しましょう」といった指示を与えることによって、会話や作文の技能パートを確保してある、というタイプの教科書も見られます。しかし、初級が終わった段階の学習者にとっては、あるテーマが与えられ「作文しなさい」と指示されてもスラスラ書くことはなかなか難しいものです。本書では、見開きで例（サンプル）を提示して、それを見ながらスクリプトが書ける工夫がなされています。また、スクリプトで使ってほしい文型を「表現」のパートで説明してあり、例文を真似しながら書くことができるようになっています。発表に向けた段階を丁寧に経ているため、中級前半の学習者でも取り組みやすい内容になっているのではないかと思います。最近タスクベースの教科書が増えてきましたが、中級後半からのものが多い印象です。本書は、初級が終わってすぐの学習者にも達成感が得られるプロジェクト・ワークを経験してほしいという思いから、対象を「初中級から」としました。テーマに関わる語彙に関しては導入が必要ですが、文型については初級で学んだものを中心に使ってもスクリプトを書くことができます。

筆者が東京外国語大学で実践した際のスケジュール、学習者の反応など、本書を使っていた際に参照していただけるよう、この「教師用手引き」にまとめて掲載しました。先生方が授業を組み立てる上で少しでもお役に立てればと願っています。

「教師用手引き」の内容**【学習内容】**

Step 1 から Step 4 までの段階で何を学習するのか、主な内容を箇条書きで示しています。

【課の位置づけ】

本書全体を通して見たときに、ひとつひとつの課がどのような位置づけにあるのか、どのようなプロジェクト・ワークを行うのかを説明しています。

【学習者への動機づけ】

学習者がこのテーマについて学ぶことにどのような意味があるのか、その背景などを説明しています。基本的には本書をご使用になる先生に理解していただければいいと思いますが、学習者に説明していただいてもいいと思います。

【表現のポイント】

それぞれの課には、PPT やスクリプトを作成する際に使ってほしい表現（語句や文型）があります。その課ではどのような表現の定着をねらっているのかを説明しています。

【進め方】と【スケジュール案】

1 回 70 分の授業でどのように進めるか、スケジュール案を示しています。教育機関によっては 1 コマの時間が 70 分以上あると思いますが、出席管理、課題の回収・返却、小テスト・クイズの実施など、他にも授業内で行うべき活動があるかもしれません。そういった時間を除き、本活動のために使える時間を短めに 70 分としました。もっと長く使える場合は、もう少し余裕ができると思います。あくまでも例ですので、伸ばしたり縮めたり、場合によっては活動の一部を宿題（自学）にしたりして応用していただければと思います。東京外国語大学で実践した際には、毎日小クイズを行っていたこともあり、活動のために使えた時間は 70～80 分程度でした。

【実践した際の学習者の様子・反応】

本書は、東京外国語大学の中級前半の総合授業と、短期日本語・日本文化研修で用いたものが土台となっています。実践した際に学習者がどのような反応を示したのか、どのような意見が出たのかについて紹介したり、役に立ちそうなアドバイスを紹介したりします。

Lesson 1

アニメから日本の生活を見てみよう

【学習内容】

Step	内容
Step 1 導入	日本の家と生活に関することばを知る。 日本の家にはどのような特徴があるのかを考える。 自分の国や地域に見られる家と同じ部分、違う部分について考える。
Step 2 読解	アニメ『ドラえもん』に出てくる「のび太の家」について書かれた読み物を読む。 内容が理解できたか、設問で確認する。
Step 3 表現の学びと作文	自分の国や地域に見られる家／生活を描写し、日本の家／生活とはどのような違いがあるのかを紹介する作文を書く。
Step 4 口頭発表	ペア（グループ）で発表する。 お互いに質問をしたり、情報をシェアしたりする。 グループやクラス全体で「日本の家や日本人の生活の特徴」を探してシェアする。 活動をふりかえる。

【課の位置づけ】

この課では「プロジェクト・ワーク」というほどの活動はありません。Lesson 1は、本書全体を1つの過程として見たとき、**ウォーミングアップ**に位置づけられる課になります。日本のアニメは多くの日本語学習者にとって人気のコンテンツですので、楽しみながら学び、アイスブレイキングとして使っていただければと思います。アニメ作品として『ドラえもん』と『あたしんち』を例に出していますが、それらのアニメを実際に見せて気がついたことを発表し合うなどの発展的な活動をするのもおすすめです。

【学習者への動機づけ】

- ・実際に日本の家を見たことがなくても、アニメや漫画、ドラマや映画などの媒体を通して日本の家に対する何らかの知識、関心を持っている学習者は多いのではないかと思います。そのため、p.15の「**3** クラスメートと経験について話しましょう」では、実際に日本の家に行った経験を聞く①の質問で「はい」の人と「いいえ」の人に分かれていますが、アニメや漫画、ドラマや映画などで見たことがあるという経験を聞くB②の質問では「はい」の答えしか想定していません。
- ・仮に日本の家を全く見たことがないという学習者がいた場合は、授業の前に何かを見ておくように指示しておく、教室で何かを見る、といった活動を挟んでから始めるのも良いと思います。
- ・画像検索で様々なアニメ・漫画に登場する家の間取りは探すことができますし、YouTubeで「サザエさん 家」「クレヨンしんちゃん 家」などで検索すると、詳しく再現している動画なども見つかります。その国の家／生活の特徴を知るとは、地理的条件や習慣などを知ることにもつながるということをどこかでアナウンスしても良いでしょう。

【表現のポイント】

名詞、形容詞、「ある」「いる」のような存在を表す動詞、状態を表す動詞を使って描写文を作ります。これらは初級で既に学んだ内容ですが、学習者にとって、特に**動きを表す動詞にテイル・テアルをつけて状態的な表現にする**のは難易度の高い項目だと言えます。動詞の自他の区別の難しさに加え、「自動詞・受身形+テイル」（かかっている）「他動詞+テアル」（かけてある）の意味の違いの難しさも相まって、中級以降になっても誤用が残る箇所でしょう。自分の住んでいた家を描写する際に、なるべくこうした描写文を使えるように指導し、口頭でも練習をさせることで、少しでも定着につながるようにしたいところです。さらに、日本と自分の国の間で、家のつくりや生活スタイルにどのような違いがあるのかを比較する活動を通して、「～は」「～も」の使い方にも慣れて

ほしいと考えています。

【進め方】(4回 or 3回)

例として**1回70分の授業×4回で終わる**スケジュール案を下に示します。それだけの時間が取れない場合は、2回目のStep 2の扱いを軽くして、**3回で終わらせることもできます**。具体的には、読み物を読むことを宿題にしているので、2回目の授業では読み物の内容確認は行わず、設問の答え合わせのみを行って、すぐにStep 3に入れば1日縮めることができます。

【スケジュール案】

回数	Step	授業内活動	宿題
1回目	Step 1	・課の目標、全体のスケジュールを確認する(10分) ・グループに分かれ、写真を見て「ことば」の単語を考える。説明を読んで答え合わせ、クラス全体で確認する(25分) ・グループに分かれて「活動」を行う(25分) ・Step 2の「1読む前に考えましょう」を話す(10分)	Step 2の読み物を読んでおく
2回目	Step 2	・クラス全体で読み物の内容確認、設問の答え合わせをする(30分) ・(可能であれば)実際に『ドラえもん』を見せて、日本の家や日本人の生活について気がついたことを話す活動、『あたしんち』もしくは他の最近のアニメを見せて、『ドラえもん』の家との違いを探させる活動などをする(30分) ・Step 3の1-①の「表現」の文型を一緒に確認する(10分)	Step 3 1 -①(p.19)の「表現」を見ながら 1 -②(pp.20-21)の問題を解いておく
3回目	Step 3	・1-②(pp.20-21)の宿題の答え合わせをする(10分) ・2-①(p.21)の「表現」を確認、2-②(p.21)を聞き合う(20分) ・3(p.22)の作文をする、終わった人から教師にFBをもらう(30分) ・翌日の発表の予告をする、清書して口頭で発表練習をしておくことを指示する(10分)	作文が終わらなかったら宿題。終わった人は発表練習をしておく
4回目	Step 4	・ペア(グループ)を作って発表する(30-40分) ・グループ(クラス全体)で日本の家や日本人の生活の特徴を見出して発表する(20分) ・活動をふりかえる(10分)	

【実践した際の学習者の様子・反応】

- ・東京外国語大学で主催した短期日本語・日本文化研修で実践した際、学習者は東アジアの都市部から来た学習者が多く、一軒家に住んだことがない学習者がほとんどでした。『ドラえもん』を見て、家の中の階段、廊下、畳の部屋、浴槽があるお風呂などが珍しく感じるという感想が出ていました。
- ・発展活動として、『ドラえもん』と比較できる(70～80年代の住宅事情の一端が見える)それぞれの国のアニメを紹介してもらいました。韓国の学習者はアニメ『赤ちゃん恐竜ドゥーリー』^{※1}、台湾の学習者はアニメ映画『幸福路のチー』^{※2}を紹介していました。

※1(韓国のアニメ)「ドゥーリー」は当時ソウルで流行した「フランス住宅」に住んでいました。「フランス住宅」とは、屋根裏部屋があったり、玄関がアーチ型だったり、バルコニーが神殿風だったり、全体的に西洋のスタイルにはなっていますが、直接フランスとは関係がありません。70年代、一軒家を夢見る中産階級に対して「夢のある家」ということで名前に「フランス」がつけられたそうです。

※2(台湾のアニメ映画)「チー」は、1階が店舗、2階以上がアパートになっている集合住宅に住んでいました。隣と壁を共有しているタウンハウス式の建物です。人口の急増により都市部では場所が足りないため、こうしたスタイルの集合住宅が多く建てられたそうです。それ以外にも、多湿であることから床が石やタイルになっていたり、防犯のため窓には鉄格子が入っていることがわかりました。

こうした活動を通して、住宅というのは、その国の地理的な条件、経済的な状況や生活に深く関わっているのです。住まいの比較を通して国ごとの様々な事情がわかるということを確認しました。

Lesson
2

日本の伝統文化にふれよう

【学習内容】

Step	内容
Step 1 導入	日本の伝統文化に関することばを知る。 日本の伝統文化の経験についてクラスメートに聞く。話す。 体験してみたい伝統文化と、その理由についてペアやグループで話す。 体験計画を考えたい伝統文化を1つ選ぶ。
Step 2 読解	日本の伝統芸能、歌舞伎について書かれた読み物を読む。 内容が理解できたか、設問で確認する。 グループで伝統文化の体験イベント計画についてディスカッションする。
Step 3 計画表の作成と スクリプトの作文	伝統文化を体験するための計画表を書く。 プレゼンテーションのスクリプトを書く。
Step 4 口頭発表	グループごとに計画を発表する。 お互いに質問をし合う。 活動をふりかえる。

【課の位置づけ】

日本の伝統文化の体験イベント計画を立案するのが目的です。計画書を作り、それを説明するスクリプトを作成します。Lesson 5 や Lesson 6 のように社会問題に対して何らかの解決策を考えたり提案したりするのに比べると、情報を集めて紹介するのがメインの活動ですので、比較的負荷が少ないと言えます。読み物は短く、文型もそれほど難解ではありません。楽しみの要素が強い課になっていると思います。

【学習者への動機づけ】

- ・ 近年、日本文化に対する学習者の興味・関心は、ポップカルチャー、現代文化に集中しているように感じられます。授業の中で歌舞伎の映像を見せるなどして、伝統文化（伝統芸能）にふれる時間としても良いと思います。
- ・ 来日している学習者にとって、体験イベントの計画を立てるのは現実味がある活動です。在外の教育機関で学んでいる学習者の場合は、日本に行ったときに体験できるように計画を立てても良いと思いますし、それぞれの国でも体験できることがある場合（ジャパンフェスティバルが行われているなど）は、その紹介でも構わないと思います。

【表現のポイント】

この課では、**可能表現**を多く用います。可能表現は既に初級で学んでいる内容ですが、ある場所や機関において何ができるのかを説明するという文脈で使えるように指導します。さらに、特定の条件下においてできることを説明する際に「～なら＋可能表現」（学生なら、1,800 円で見られる）や「～ば＋可能表現」（難しければ、イヤホン・ガイドを借りることもできる）など、条件表現と組み合わせることもあります。計画書、そしてプレゼンテーションのスクリプトのために作文し、それを口頭で練習することで、可能表現や条件表現の使用の定着が促進されればと考えています。

【進め方】（5 回 or 4 回）

例として **1 回 70 分の授業 × 5 回で終わる** スケジュール案を下に示します。それだけの時間が取れない場合は、2 回目の Step 2 の扱いを軽くして、**4 回で終わらせることもできます**。具体的には、読み物を読むことを宿題に

しているので、2回目の授業では読み物の内容確認は行わず、設問の答え合わせのみを行って、すぐに Step 3 に入れば1日縮めることができます。

【スケジュール案】

回数	Step	授業内活動	宿題
1回目	Step 1	・課の目標、全体のスケジュールを確認する（10分） ・グループに分かれ、写真を見て「ことば」の単語を考える、説明を読んで答え合わせ、クラス全体で確認する（25分） ・クラス全体で日本の伝統文化の体験についてシェア。ペアやグループを作り、どのような伝統文化を体験したいか決定。できるかどうかインターネットなどを使って情報収集する（25分）	
	Step 2	・Step 2の「1 読む前に考えましょう」を話す（10分）	Step 2の読み物を読んでおく
2回目	Step 2	・クラス全体で読み物の内容確認、設問の答え合わせをする（30分） ・（可能であれば）歌舞伎の映像を見せて、どれくらい理解できるか、どう思ったか、感想をクラスでシェアする（15分） ・グループで計画表を書くための情報収集をする（25分）	Step 3の「 1 計画表」（p.33）が書けるように、情報を集めておく
3回目	Step 3	・計画表を仕上げて教師に提出、教師にFBをもらう（70分） ※計画表でOKをもらったグループから「2」のスクリプトを書き始める	「表現」を確認しておく
4回目	Step 3	・スクリプトを書き上げて教師にFBをもらう（70分） ※写真やキーワードを視覚的に見せたい場合は、簡単なPPTを作成しても良い。終わったグループから口頭で発表練習を行う	発表練習をしておく
5回目	Step 4	・グループごとに発表する（60分） — 他のグループの計画のポイントをメモする — 質疑応答をする ・活動をふりかえる（10分）	

【実践した際の学習者の様子・反応】

- ・東京外国語大学の総合日本語の授業で実践した際、人気のあった体験内容は、「着物を着付けしてもらう」「和食を作る」「和菓子を作る」「お花見に行く」「祭りに行く」「花火大会に行く」「剣道を教えてもらう」などでした。
- ・最近の学習者はインターネットを使った情報検索に慣れていますし、外国人向けの文化体験を紹介する各国のサイトも様々あるようで、「情報が探せない」というトラブルは見られませんでした。ただ、見つからなかったときにすぐ紹介できるように、教師が情報を集めておいたほうが安心でしょう。
- ・PPT作成を必須にはしていませんが、写真を見せながら発表するほうが効果的です。筆者が実践した際は、ほとんどのグループがPPTを作成していました。着物、和菓子、上野公園の花見、剣道の道場などを見せたり、料金や行き方、持ち物や注意点などを箇条書きでまとめて見せたりしていました。
- ・発表した後で、簡単なパンフレットを作って配布して、情報をシェアした年もありました。授業後に学習者同士、実際に行ってみたケースもあったそうです。
- ・コロナ禍で来日できない学習者に対してオンライン授業でこの課を実践しましたが、いつ日本に行けるかわからない中でもネガティブな反応を示す学習者はいませんでした。いつか日本に行けたときにはぜひ行ってみたいと計画を立てているように見えました。

Lesson

3

いろいろな食文化を知ろう

【学習内容】

Step	内容
Step 1 導入	日本の料理に関することばを知る。 日本での食事に関して、それぞれの経験をシェアする。 エリーさんと田中さんのイラストを見て、話の内容を予想する。 話を聞いたり、読み物を読んで、内容を理解する。設問についてペアやグループで話し合う。
Step 2 読解	食文化による食べていいもの、食べてはいけないものについて、知っていることを話し合う。 いろいろな食文化について書かれた読み物を読む。 内容が理解できたか確認する。
Step 3 PPT の作成と スクリプトの作文	グループで選んだ食文化について情報をまとめる。 選んだ食文化について、わかったことを PPT にまとめる。 プレゼンテーションのスクリプトを書く。
Step 4 口頭発表	グループごとに選んだ食文化について発表する。 お互いに質問をし合う。 活動をふりかえる。

【課の位置づけ】

この課から、PPT を用意し、スクリプトも書いて本格的なプレゼンテーションをする活動が始まります。ただし、Lesson 5 や Lesson 6 のように社会的な問題に対して解決策を提案するのに比べると、情報を集めて紹介したり、自分の経験をシェアしたりするのが中心のプレゼンテーションですので、比較的やさしい方だと言えます。

【学習者への動機づけ】

- ・ 既に来日している学習者にとっても、これから来日する予定のある学習者にとっても食の問題は重要です。宗教による禁忌、ベジタリアンやヴィーガンの食生活に対して、最近日本でも周知が進んできましたが、まだ足りない部分もあります。p.46 1-①の食品ピクトグラム、p.47 以降の読み物は、東京都が外食産業に向けてメニュー作りに役立てるよう公表している資料を使って作成しています。実際に使われているもので、ぜひこの課を通して知ったことを実生活に役立ててほしいと思います。
- ・ この課は、日本で育った学生（主に日本人学生）との交流授業にしても実りのある課だと思います。日本の学生にとって未知のことが多いと予想されますので、同じ立場で学び合えます。テキストにあるカフェテリアのメニュー（p.53）は東京外国語大学のものですが、ある宗教の学生にとっては食べられないものばかりです。こうした実態は、日本の学生が知っておくべき内容ではないでしょうか。

【表現のポイント】

- ・ この課では**禁止・注意の表現**を使います。前者が平叙文（述べたての文）で、後者が命令文（働きかけの文）になっています。ある宗教、場所、コミュニティなどにおいて禁止されていることを**描写する文**として「～では、～（すること）が禁止されている」という表現が出てきます。禁止の対象になっているものが主語に立ち、述語が受身形になっているのがポイントです。
- ・ 初級終了段階の学習者にとっては、「すみませんが、私のカバンを**取ってください**」のような**依頼表現**を使う機会はあるかもしれませんが、「～ようにしてください」「～しないように気をつけましょう」といった**注意喚起表現**は、せっかく学んでもなかなか使う機会がなかったかもしれません。この課のようなプレゼンテーションで、不特定多数の聞き手に対して呼びかけをするときに用いるのは自然な用法なので、ぜひ使ってほしいと思います。

【進め方】(5回 or 4回)

例として**1回70分の授業×5回で終わる**スケジュール案を下に示します。なるべく口頭練習までしっかりしてほしいという気持ちから、準備の日(Step 3に使う日)を2日とっていますが、それだけの時間が取れない場合は、3回目だけで準備をさせて、4回目に発表をすれば**4回で終わらせることもできます**。

【スケジュール案】

回数	Step	授業内活動	宿題
1回目	Step 1	・課の目標、全体のスケジュールを確認する(10分) ・クラス全体で写真を見て「ことば」の料理名を答える(10分) ・クラス全体で日本の食事に関する経験についてシェア。ペアやグループを作り、エリーさんと田中さんの4コマ漫画を見て、何が起こったのかを予想する(25分) ・エリーさんと田中さんの話を聞いて(リスニング)、わかったことを書いた上で、読み物を読んで内容を確認する(25分)	Step 2の■-①ピクトグラム(p.46)が何を表しているのか考えておく
2回目	Step 2	・ピクトグラムの答え合わせをする(10分) ・宗教や考え方によって何が禁止されているのか知っていることを話し合う(15分) ・グループを作り、どの宗教や考え方を担当するのか決定する(10分) ・グループで自分が選んだ宗教や考え方の読み物を読む(15分) ・その宗教や考え方では何が禁止されているのかをメモ。また、日本の学生食堂のメニューでは何が食べられるのかを確認する(20分)	どのようなことを発表するのか考えておく
3回目	Step 3	・PPTを作成する(30分) ・スクリプトを書く(40分)	「表現」を確認しながらPPTやスクリプトの作成を進める
4回目	Step 3	・PPT、スクリプトを提出して教師にFBをもらう(70分) ※終わったグループは口頭で発表練習を行う	発表練習をしておく
5回目	Step 4	・グループごとに発表する(60分) — 他のグループの発表のポイントをメモする — 質疑応答をする ・活動をふりかえる(10分)	

【実践した際の学習者の様子・反応】

- ・東京外国語大学は世界中から留学生が集うため、様々な宗教、考え方の学習者がいました。グループ分けをする際には自分のやりたい内容を選ばせていました。何かの宗教に集中したり、逆に避けられたり、やりにくいと不満が出る、といったことは幸い見られませんでした。傾向としては、ベジタリアンが人気でした。
- ・ヨーロッパ系の学習者の中にはベジタリアン、ヴィーガンの学習者が増えているという実感があります。動物の権利、環境保護、健康のためなど理由は様々でした。そういった学習者は日本での生活に苦労しているので、いろいろと言いたいことがあるようです。様々な経験談がシェアされました。
- ・学習者の多くは、読み物で得た情報以上のことを調べて発表していました。例えば、ユダヤ教の場合、血液、ほとんど全ての虫、偶蹄目反芻動物は食べられない一方で、虫の中でもバッタ科のものや偶蹄目反芻動物ではない動物、鶏肉、鴨肉、うろこのある魚などは食べることが禁じられていない、といった情報を足して発表していました。その他にも、自分の国において、それぞれの宗教を信じている人は暮らしやすいかどうかについて発表する学習者もいました。
- ・現地の教育機関で行う場合、その国や地域の学習者しかいない場合もあるかもしれませんが、今後、学習者が外国に住むことがあるかもしれませんし、グローバル企業に就職することもあるかもしれません。自分の国にやってくる外国人の食の問題を把握することも重要です。ぜひそのような話をしていただき、モチベーションを高めて取り組んでいただければと思います。

Lesson 4

地震から身を守ろう

【学習内容】

Step	内容
Step 1 導入	防災用品に関することばを知る。 地震が起きたとき、外国人がどのようなことに困るのかを知る。 どのシチュエーションのビデオを作るかをグループで相談する。
Step 2 読解	地震のとき、どうしたらいいのかを説明している読み物を読む。 内容が理解できたか確認する。
Step 3 ビデオの撮影・編集、 スクリプトの作文	どのようなビデオを作るのか内容を考える。 ビデオのスクリプト（シナリオ）を書く。 ビデオを撮影・編集する。 ビデオを紹介するプレゼンテーションのスクリプトを書く。
Step 4 口頭発表	ビデオを紹介するプレゼンテーションをする。 自分たちが作ったビデオを見せる。 ○×クイズでクラスメートの理解度を知る。 活動をふりかえる。

【課の位置づけ】

この課では本書で唯一、**ビデオを作成する**プロジェクト・ワークをします。地震に遭遇したときにどのようにふるまえばいいのかをクラスメートに教えるビデオを作成します。若い学習者の場合、ビデオを作ることに慣れているケースが多く、アプリを使って比較的容易に作れるようでした。楽しみながら防災意識が高められればと願っています。

【学習者への動機づけ】

- ・日本はいつ大地震に見舞われるかわからない国です。どの教育機関でも避難訓練を実施していると思いますが、家にいるとき、外にいるとき、ショッピングセンターにいるときなど、様々なシチュエーションにおいて、どのように行動すればいいか詳しく知らない学習者もいるのではないのでしょうか。ビデオのスクリプト（シナリオ）を書いたり、実際に演技したり、それを撮影・編集したりする過程で、適切な行動について改めて考えるきっかけになり、実際にそうした場面に遭遇した際に、少しでも役に立つようにというねらいがあります。
- ・「ことば」は防災用品に関するものなので、本書での活動にはあまり関わらないかもしれませんが、しかし、防災用品に対する知識、ひいては日頃の備えも大切なので、あえて「ことば」を防災用品に関するものとした。この課は全体として「日本語教育」でありながら「防災教育」にもなるようにという意図があります。

【表現のポイント】

この課では**命令（依頼）・禁止の表現**を多く使います。実際に演技をして見せるため、話しことばを用いる必要があります。書きことば（丁寧な話しことば）では「～てください」、「～ないでください」という命令（依頼）・依頼表現を使いますが、クラスメートや友人に対する話しことばでは「～て」、「～ないで」になります。また、「～なければいけません」という義務の表現、「～てはいけません」という禁止の表現は、クラスメートや友人に対する話しことばでは「～なきゃ」や「～ちゃだめ」になります。こうした話しことばは、アニメや漫画、ドラマなどを通して学習者は耳慣れているかもしれませんが、書きことばとの関係を改めて理解できる課になればと思います。

【進め方】(6回 or 5回)

例として**1回70分の授業×6回で終わる**スケジュール案を下に示します。ビデオを作って披露するだけでなく、そのビデオの見どころを説明するプレゼンテーションも活動に入れています。余裕がない場合、プレゼンテーションをカットすれば、**5回で終わらせることもできます**。

【スケジュール案】

回数	Step	授業内活動	宿題
1回目	Step 1	・課の目標、全体のスケジュールを確認する (10分) ・グループで、「ことば」の絵を見て何を表しているか考える。説明を読んで番号を答える、答え合わせをする (15分) ・クラス全体で地震に関する体験についてシェア (10分) ・ペアやグループを作り、外国人の震災経験の吹き出しを読み合う (20分) ・グループごとに、どのようなシチュエーションのビデオを作るのかを考えて、クラス全体で共有し、重なりがないかなどを確認する (15分)	Step 2 ❶の読み物 (自分のグループが選んだもの) を読んでおく
2回目	Step 2	・自分のグループが選んだシチュエーションに関する読み物を読んだ結果、わかったことをまとめる (20分)	
	Step 3	・5分くらいのビデオを作るために、❶ ビデオの内容 (p.75, 場所、登場人物、大まかな内容、役割) について決める (20分) ・❷ スクリプト (シナリオ) (p.77) を書く (30分)	「表現」を確認しながら、スクリプトを書き進める
3回目	Step 3	・スクリプトを書き終えたら教師にFBをもらう (30分) ・ビデオ撮影に行く (40分)	全部撮影できなかった場合は撮影する
4回目	Step 3	・撮影が終わっていないだったら撮影、終わったグループは編集をする (70分) ※終わったグループは教師にFBをもらう	○×クイズを考えておく
5回目	Step 3	・プレゼンテーションのスクリプトを作成する (70分) ※終わったグループは教師にFBをもらう。口頭で発表練習を行う	発表練習をしておく
6回目	Step 4	・グループごとに発表する (60分) — 他のグループの発表について評価する — 質疑応答をする ・活動をふりかえる (10分)	

【実践した際の学習者の様子・反応】

- ・これまでの実践においては、動画編集ができる学習者を各グループに1人ずつ配置できました。グループ分けの際には、動画編集が可能な学習者がいるかどうか、確認する必要があると思います。仮に動画編集が難しい場合は「演技」をして見せるのでも良いと思います。同じようにスクリプトを書き、練習して、その場で寸劇を見せるという方法です。
- ・大学内で撮影してほしいので、ショッピングセンターでの地震や外を歩いているときの地震については、大学構内でそれらしく撮影してもらいました。東京外国語大学の場合は大学構内に寮がありますので、寮にいたときに地震にあったシチュエーションのグループは、その時間、寮に帰って撮影するのを許可しました。構内であっても、他の人が映り込んだり、授業中に廊下や教室で騒いだりしないように注意喚起することが大切です。
- ・何度か実践をしましたが、どの回においても同様に、学習者は力を入れて取り組むケースが多く、コメディ映画風にしたりグループ、アニメーション映画風にしたりグループ、無声映画風に表情と字幕で表現したりグループ、RPGゲームのように作り込むグループなど、力作揃いでした。学習者は時間さえ許せば手を入れたがる傾向がありましたので、この課は土日を含んで予定を組み、時間に余裕を持たせる工夫をしたりもしました。

5 教育を考えよう

【学習内容】

Step	内容
Step 1 導入	性格や感情などに関することばを知る。 性格や意識に関するアンケートに答える。クラスメートに質問する。 アンケートの結果について、予想と理由を考えて発表する。 「自己肯定感」に関するグラフから情報を読んでまとめる。
Step 2 読解	日本の現在の教育について書かれた読み物を読む。 内容が理解できたか確認する。
Step 3 スクリプトの作文	グループで教育についてディスカッションをする。 自己肯定感を高める教育の提案を3つ書く。 プレゼンテーションのスクリプトを書く。
Step 4 口頭発表	グループごとに、自己肯定感を高める教育の提案を発表する。 お互いに質問をし合う。 活動をふりかえる。

【課の位置づけ】

以前の課では、主に情報を集めて紹介するプロジェクト・ワークをしてきましたが、この課から、今の社会に見られる課題に対してどのような改善策・解決策が示せるのかをディスカッションして意見をまとめ、**提案するタイプのプロジェクト・ワーク**が始まります。

【学習者への動機づけ】

- ・「自己肯定感」などのことばは難解に感じられるかもしれませんが、内容そのものは学習者にとって身近なものではないかと考えています。4カ国（日・米・中・韓）の高校生に実施したアンケートに学習者自らが答えた上で、自分の国の高校生はどのような自己評価の傾向があるのかを予想したり、日本の現状を知り、その原因として「教育」という要素を取り上げて自己肯定感を高めるためにどのような提案ができるのかを考えます。
- ・この課も交流授業向きの内容だと言えます。学習者は、自分が国で受けてきた教育を思い出しつつ、「こういった先生の言動やクラスメートの助けが自分に自信を与えてくれた」といった良い経験、逆に、良くなかった経験をシェアし、より良い教育への提案をまとめる議論をしますが、そこに日本で教育を受けた学生が加わると、日本の教育事情の情報も加わります。日本の学生が議論に加われればなお良いですし、プレゼンテーションを聞いてコメントする聴衆として参加して、質疑応答で議論するのも良いでしょう。

【表現のポイント】

- ・ **義務を表す「べきだ」**という文型自体は中級で導入されるものですが、学習者が実生活でこれを用いる機会はなかなか想定しにくいものです。クラスメートや友達に対して「メアリさんは、もっと漢字の練習をするべきです」と発話するのは、適切な使用とは言えないでしょう。一方、**社会的な課題に対する提案**として「教師は学生ひとりひとりの個性を大切にすべきです」と用いるのは自然な使用です。この課は、「べきだ」や「～{する／した}ほうがいい」を使って、社会に対する提案をする機会を与えています。
- ・ **「～ば」や「～と」の条件表現**は、既に初級で導入されている項目です。「～ば」は「読めばわかります」「急げば間に合います」のように、その動作を行うとプラスの結果がもたらされることを表す文で導入されると思います。一方「～と」は「このボタンを押すと、止まります」「この道をまっすぐ行くと駅に出ます」のように恒常的に（一般的に）成り立つ条件文で導入されることが多いと思います。この課では、**「自分の提案通**

りにすれば、良いことが起こる」「提案通りにしないと（このままだと）、良くならない」という用法を意識させて作文し、練習することで、条件表現の用法の違いを定着させることをねらっています。

【進め方】（5回 or 4回）

例として**1回70分の授業×5回で終わる**スケジュール案を下に示します。それだけの時間が取れない場合は、1回目にStep 1の「活動」を全て終わらせてしまい、宿題としてStep 2の読み物を読むことを課しておきます。そうすれば、2回目の読み物は授業で読む時間を取る必要がなくなり、設問の答え合わせのみを行って、すぐにStep 3に入れば、1回縮めて**4回で終わることができます**。もしくは、この課ではPPTを作る必要がないので、急げば4回目と5回目を1回で済ませることもできます。

【スケジュール案】

回数	Step	授業内活動	宿題
1回目	Step 1	・課の目標、全体のスケジュールを確認する（5分） ・グループで「ことば」の絵を見て何を表しているか考える、理解できたかどうか、練習問題（p.87）を解いて答え合わせをする（15分） ・アンケート（p.88）について、自分で答えてみる（10分） ・ペアを作り、お互いに聞き合う（25分） ・クラス全体で、どのような結果だったのか軽くまとめをする。その上で、同じアンケートを実施した際、自分の国の高校生ではどのような傾向が出るか、日本ではどうかを予想する（15分）	p.91のグラフを見て、p.90の❸-②と③を完成させておく
2回目	Step 1	・❸-②と③（p.90）の答え合わせをする（15分）	p.94の吹き出しを読みながら、日本の高校生の自己肯定感が低い原因について考えておく
	Step 2	・読み物を読む。設問に答える（40分） ・p.94の頭出しをしておく（p.94の❶の問題を読み合わせして、日本の高校生の自己肯定感が低い理由について考えてくるように宿題を出す）（15分）	
3回目	Step 3	・自己肯定感を高める教育の提案について議論する（30分） ・プレゼンテーションのスク립トを書き始める（40分）	「表現」を確認しながら、スク립トを書き進める
4回目	Step 3	・スク립トが完成したら、教師のFBをもらう。口頭で発表練習をする（70分）	発表練習をしておく
5回目	Step 4	・グループごとに発表する（60分） — 他のグループの提案をメモする — 質疑応答をする ・活動をふりかえる（10分）	

【実践した際の学習者の様子・反応】

- ・ パートナーにアンケートをする活動をする前に、アンケート項目を質問文に変える練習をする箇所があります（p.89, ❷-①）。余分な活動に見えるかもしれませんが、これは実践を試みた上での反省から書き加えた箇所です。この過程を経ずに（「質問のし方」「答え方」を確認せずに）ペア活動を行ったときは、あちこちから不自然な聞き方、不自然な答え方が聞こえてきました。平叙文を見て、その場で適切な質問文に変えるのは、初級終了段階ではそれほど簡単なことではありません。ただこれは学習者のレベルにもよると思いますので、レベルに応じて使ったり割愛したりしていただければと思います。
- ・ この課では多くの場合、交流型授業を取り入れていました。ディスカッション時に参加してもらうこともあれば、学習者の発表時に聴衆として参加し、提案に対して意見やコメントを言ってもらったこともありました。交流型授業にもいろいろなやり方があると思いますが、1つの事例として後者のケース（発表会への参加）を紹介します。まず日本語母語話者の学生には、学習者が発表する3つの提案を聞き取って、板書してもらう

役割を担ってもらいました。PPTがないので、提案内容が完璧には聞き取れない学習者もいたためです。4つのグループが3つずつ提案を述べたとしたら、12の提案が板書されます（この中には重複する提案も見られます）。全ての提案が出尽くしたのち、各グループに日本語母語話者の学生を配置し、どの提案が効果的だと思うか、実現可能性からはどうかなどのポイントについてもう一度話し合いをしてもらいます。時間が来たら代表者に意見を言ってもらいました。

- ・これまでの実践の中では様々な教育の問題点が指摘されました。クラスサイズの問題（1クラスの人数が多すぎる）、授業の方法の問題（一方的に先生が話す時間が長い）、先生の態度（校則が厳しかったり、先生の態度が友好的ではないことがある）、期末テストや入学試験の難易度（試験が難しすぎる）、クラスメートと助け合う制度があるかどうか（協働型の授業があまり多くない）、教育の目的（結果を求めすぎる）などを問題視する意見が多数を占めていました。
- ・提案としては、意見を交換したり発表したりする機会を増やす、協働授業を増やす、結果ではなく過程を重視する、親子でカウンセリングを受ける機会を増やす、大学生が高校生にアドバイスする機会を増やす、お互いを尊重することを学ぶ機会を増やす、といった意見が出ました。教師の態度としては、教師の仕事が多すぎるので減らし、教師自身がリラックスして教えられるようにする、とにかくよく学生を褒めるようにする、学生ひとりひとりを尊重する、他の学生とは比較しないようにする、といった意見が出ました。
- ・「自己肯定感」という点では、日本の数値の低さが目立ちますが、必ずしも、日本の教育が全ての面で遅れているわけではありません。例えば、特別活動（行事、委員会、係活動、生徒自ら清掃活動をしたり配膳をしたりするなどの日常の活動）を行うことによって、協調性や公共性を育てる部分で成功している側面もあると思います。ネガティブな面ばかりが強調されることが気になる先生は、日本の教育の良い部分を紹介するのも良いのではないのでしょうか。
- ・なお、高校生の自己肯定感に関するアンケートに対して、「文化的背景や価値観の差が根にあるのではないかと指摘する学習者もいました。つまり、「日本では自己肯定感が低いフリをするのが美德とされている」「アメリカでは自信がなくても自信があるフリをしなければいけない」といった価値観がアンケート結果に反映されてしまっているのではという指摘です。それも一理あると思います。その一方で、日本人学生と共に学ぶ機会が多い留学生からは、しばしば「授業中、日本人学生は自分の意見を言おうとしない」「授業が終わった後、雑談としてなら意見を言うのに、皆の前では言わない」といった不満を聞くことがあります。「みんなの前で失敗したくない」「意見を言うことが恥ずかしい」「“そういうタイプ”と思われたくない」という日本人学生にありがちな気質は、ある程度、留学生が抱く共通見解のようです。背景として、そうした不満を持つ留学生は、幼い頃から自分の意見を主張するのが自然な文化で育っていたり、小学生時代から授業で討論が多く取り入れられていたり、という側面が指摘できるようです。そのようなことを議論した結果、教育のあり方にも1つの原因があるのではないかと、という考え方に納得したようでした。
- ・また、学習者の中には、自己肯定感に最も大きな影響を与えるのは家庭環境であり、教育は二の次であるという意見もありました。確かにその通りかもしれませんが、家庭環境は個別的事情が大きすぎて議論しにくいところがあります。そして、どの国にも様々な家庭がある一方で、国によって自己肯定感の持ち方に傾向があることから、公教育のあり方に1つの原因を見出すのは全く見当違いなことではないとも言えます。現に日本では、この課で参考にした、国立青少年教育振興機構によるアンケート結果を踏まえ、文部科学省で若者の自己肯定感を高める教育について討論がなされているところでもあります。そういったことを話し、ひとまず「家庭」を除いて「教育」に限定して議論するように導いていました。もちろん、教育は教育機関と家庭との協働ですので、そういった面から家庭の関わりを指摘することは許容していました。

リサイクルを考えよう

【学習内容】

Step	内容
Step 1 導入	リサイクルに関することばを知る。 リサイクルに関するアンケートに答える。クラスメートに質問する。 昔はどのようなリサイクルのシステムがあったのかを考える。
Step 2 聴解・読解	江戸時代のリサイクルについての話を聞く。 現在の日本のリサイクルについて書かれた読み物を読む。 内容が理解できたか確認する。 リサイクルの現状や、むだをなくすための方法について、クラスメートと話し合う。
Step 3 PPT の作成と スクリプトの作文	より良いリサイクルの提案を書く。 プレゼンテーションの PPT とスクリプトを書く。
Step 4 口頭発表	グループごとに、より良いリサイクルの提案を発表する。 お互いに質問をし合う。 活動をふりかえる。

【課の位置づけ】

Lesson 5 に引き続き、この課でも今の社会に見られる課題に対して、自分たちとしてはどのような解決策を示せるのかをディスカッションして意見をまとめ、**自分たちの提案を主張するプレゼンテーション**をします。読み物は難しい語彙が多く、読み応えのある内容になっていると思います。最後の課ですので、総仕上げとしてじっくり取り組めればと思っています。

【学習者への動機づけ】

リサイクルは、学習者にとっては「またか」と感じられるトピックかもしれませんが、私たちの生存に関わる重要かつ喫緊の問題です。トピック自体は目新しさがなくても、内閣府が実際に行ったりサイクルに関する世論調査から日本人の意識・行動がわかりますし、循環型の社会（江戸時代）と大量生産・大量消費社会（現代）を対比的に見る 2 つの文章には何かしら新しい発見があるかもしれません。新品の服の大量廃棄問題は日本だけの問題ではなく海外でも起こっている問題です。学習者の興味を引きつつ、それぞれの国での経験などを持ち寄って良い提案につなげられればと思っています。

【表現のポイント】

この課では、Lesson 5 でも出てきた「べきだ」、条件表現の「～ば」「～と」が再び登場します。理由を表す文末形式「からだ」は、既習の学習者が多いと思いますが、これまでの実践から「新品の服を燃やすのは、資源の**むだですから。**」といった文を作る学習者が一定数見られました。名詞述語やナ形容詞述語に「から」がつく場合、文末を「ですから。」で終わらせるのは、丁寧体を使っているのもフォーマルな表現だと思われるのかもしれませんが、しかし、書きことば、発表のことばとしては誤用であり、「**むだだからです**」（「むだであるからです」）としなければいけません。「べきだ」などを用いた義務表現、「からだ」を用いた理由表現、「～ば」「～と」などを用いた条件表現がしっかりと身につけばと思っています。

【進め方】（6 回）

例として **1 回 70 分の授業 × 6 回で終わる** スケジュール案を下に示します。この回はリスニングと読解があり、スクリプト、PPT 共に作成しなければならないため、6 回は必要になると思います。

【スケジュール案】

回数	Step	授業内活動	宿題
1 回目	Step 1	・ 課の目標、全体のスケジュールを確認する（10 分） ・ グループやクラス全体で、「ことば」❶の写真や絵を見て日本語で言えるかを答える。答え合わせが終わったら、❷の写真を見て何が見えるかあげる（20 分） ・ アンケート（p.105）について、自分で答えてみる（10 分） ・ ペアを作り、お互いに聞き合う（20 分） ・ グラフ（p.107）を見て、設問に答える（10 分）	《ことば》（p.108）を見ておく。翻訳を見たり辞書をひいたりして、何を表しているのか理解しておく
2 回目	Step 2	・ 《ことば》を確認する（15 分） ・ 「江戸時代のリサイクル」（p.109）を聞いて、答え合わせをする（20 分） ・ 「捨てられる新品の服」を読む。設問に答える（35 分）	❷-3)「むだをなくするための提案」（p.113）を 1 人ずつ考える
3 回目	Step 3	・ 考えてきたことを持ち寄り、グループでディスカッションする（30 分） ・ 提案書を書く（30 分） ・ 教師の FB をもらい、OK が出たら PPT を作り始める（10 分）	「表現」を確認しながら PPT の作成を進める
4 回目	Step 3	・ PPT を仕上げる。仕上がったら、プレゼンテーションのスク립トを書き始める。完成したら教師の FB をもらう（70 分）	「表現」を確認しながら PPT やスク립トの作成を進める
5 回目	Step 3	・ 終わっていないグループは、PPT とスク립トを書き終える。終わったら教師の FB をもらう（70 分） ※終わったグループは、口頭で発表練習をする	
6 回目	Step 4	・ グループごとに発表をする（50 分） — 他のグループの提案のポイントをメモする — 質疑応答をする ・ 活動をふりかえる（5-10 分）	

【実践した際の学習者の様子・反応】

- ・ アンケートに関しては、国や地域によってかなり差が見られ、ごみを減らすためにどのようなことを心がけているかについては様々な体験談が出ました。例えば、レンタルのシステム（家具のリースなど）や、生ゴミを堆肥にするといった内容は西洋諸国の方がよく実践しているようでした。一方、詰め替え製品は日本の方が進んでいると答える学習者が多かったです。
- ・ 「江戸時代のリサイクル」は少し難しい内容ですが、《ことば》を導入する際に、PPT で写真や絵を見せて（例えば、「座布団」「ぞうきん」の写真や、灰を畑にまく様子の絵など）、イメージさせてから聴解をすると理解が進みました。筆者は江戸時代の取り組みとして、服の再生の他に、金繕いをして器をリユースしていたことや、髪の毛のリサイクル、蠟燭のリサイクルなども紹介していました。
- ・ 「捨てられる新品の服」も、学習者のレベルによっては少し難しい読み物かもしれませんが。東京外国語大学の場合は英語ができる学習者が多かったので、筆者は、イギリスのバーバリー社が大量廃棄をして話題になった BBC の記事を先に読ませ、問題点をイメージさせてから読解に入っていました。（BBC 記事：<https://www.bbc.com/news/business-44885983>（最終閲覧日：2023 年 4 月 6 日））
- ・ テキスト（p.113）にも書いていますが、日本における「リサイクル」は多くの場合、3R（リユース・リデュース・リサイクル）の総称として使っていますので、学習者にもそれを理解させて考えてもらいました。学習者から出た提案の一部を紹介します。日本に対して提案したいことを発表するグループも、日本に限定せず世間一般的に提案したいことを発表するグループもありました。
 - ✓ ペットボトルを全て廃止、飲み物のボトルは瓶にして再利用
 - ✓ プラスチック製品を土に還元される材料に変えていく企業に優遇措置
 - ✓ ウォーターボトルに直接入れられる自動販売機の普及
 - ✓ （日本の家に）家具付きのマンションやアパートを増やす

- ✓（日本の家に）より良い断熱性能を持った家を増やす
- ✓ 電化製品（特に携帯電話など）をすぐに買い換えないように意識啓蒙
- ✓ 洋服をすぐに捨てない。教育の中で繕う技術をもっと教えて、リメイクして再利用する文化を作る
- ✓ フードロスをなくすためのフードバンクを普及させる